

テレビのクイズ番組で、「情けは人の為ならず」の意味を問われて、ほとんどの若者が「情けをかけると甘えてしまい、本人のためにならない」と答えた。情けないことだ。下の句を知らないのだろうか。続く下の句は「めぐりめぐりて、わが身の上に」である。すなわち、人には大いに情けをかけろという尊い教えである。

昔、東京都知事に学者が立候補した。「対話が大切です、皆さんの意見を尊重します」とやさしい言葉と笑顔で訴え、女性票の多くを獲得して当選した。

当時、東京都は人口増加が激しく、都市部は膨張の一途であり、道路などの社会インフラの整備が急務であった。彼は「一人でも反対するなら、橋はかけない」「納得いくまで話し合いましょう」と宣言して、対話集会は数多く開いたが、任期2期の中に道路建設は大幅に遅れることになった。

彼は下の句を知らなかったのだろう。「一人でも反対するなら橋は架けない」は確かにヨーロッパにある諺であるが、下の句に「そのかわり、みんな、泳いで渡れ」とあるのだ。子供、老人は泳いでは渡れない。溺れてしまう。だから、大勢の幸せのために、一部の反対を抑えて、橋を架けようというのが真意である。

中国が経済的に大躍進を始めるころ、鄧小平は「可能な人から裕福になればいい」「そのかわり、先に豊かになった人は途上にある人を助けよ」と言った。すなわち「共同富裕」達成を目的として、一時的な格差を容認しようとしたのだ。しかし、先に豊かになった人達は、下の句を忘れたのではなく、まったく無視してしまった。その結果、豊かさの格差は更に拡大し、大きな社会問題になっている。

諺ではないが、多くの日本人が下の句を知らないで、誤用している言葉に「君子の豹変」がある。子供のころ、なんで君子たるものが豹変するのか理解できなかった。出展を調べ



たら、中国の易経に「君子は豹変す、小人は革面す」とある。立派な人は必要があればすばやく考えを変える。まるで美しい豹の毛皮の模様が、ある日更に美しくなるように。凡人は表面しか変わらない。との意味であった。

中国では豹は美しく崇高な動物である。下の句とセットで使えば、誤解はなかったはずである。この言葉から日本では豹はずるい動物だとの印象が固まったのではないか。豹にとっては、はなはだ迷惑な話である。ちなみに、英語では A wise man changes his mind, a fool never. だそうである。これなら誤解は生じない。

上の句、下の句がセットになっている表現は古今東西に数多くあるが、下の句を忘れると真意が伝わらないばかりか、大きな災いをもたらすことがある。今の世の中、「下の句」を忘れずに、大いに情けをかけ合いたいものである。